

はるかに多い。調査時間内の気温は 13.8~14.3°Cで、湿度は 8日よりも高く 87~90% を示している。よつて、多湿で低温という環境条件は旺盛な歩行を起す要因のように思われる。つぎに、5月11日に於ける調査は第3表の通りで、歩行虫は朝から次第に増加して11時に最高を示し爾後は漸減している。しかし、この日の漸減傾向は比較的緩慢で、19時には若干の増加らしい記録も見られるが行動総数は9日に比べるとはるかに少く、この調査日の特徴は飛翔数が極めて多かつたことである。即ち、9時ごろより飛翔するものを見、次第に増加して15時には実に2042頭を数えられ、19時

に至つてもなお46頭を記録している。これを歩行虫の変動傾向と併せて考えると、この日の歩行虫最高時刻は最多飛翔時刻の前にあることからしても、歩行が飛翔の前駆行動らしいと考えられよう。当日の気温は9時で 21.5°C、15時で 28.3°C で高く、関係湿度は 31~66% 範囲であつたが日中は 31~40% で極めて低かつた。飛翔虫は 18.4°C からみられ 25°C 以上になると多くなり、湿度では 70% 以下の範囲内で 30~40% では非常に多くなつてゐる。したがつて、本種の飛翔は、このように高温低湿によつて誘起されるらしいことが窺知できる。

本田に於けるイネクロカメムシの移動生態

川瀬英爾・勝元久衛・石崎久次

(石川県農事試験場)

石川県ではイネクロカメムシに対する薬剤防除の適期として7月1日から5日の間をえらび、越冬成虫を本田内で駆除するようにしている。このころは越冬成虫が本田に向つて移動する最盛期にあたるがこの移動は6月20日ごろと、6月30日ごろと7月10日ごろの3つの大きな山がみられ、7月1日から5日に薬剤撒布をしてもその後移動してくるものを防除するには不適當である。このころ本虫によつて虫害をうけるとイネの分蘗が異常的にふえるため、防除の時期が早いと加害をうけた分けつ莖が無効莖にならないですむけれども、逆に防除の時期がおくれると無効莖のふえることが試験の結果わかつてきた。よつて、越冬地から数回にわたつて移動してくるクロカメムシが同一水田に飛び降りるか異つた水田に飛び降りるかは防除の適期如何と密接な関係をもち、それがイネの被害を左右する主因ともなるわけである。このような着想のもとに著者らは本田内の株につく虫数の多少によつて移動状況を推察しようとした。

まず、時期別の棲息密度差を知ろうとして越冬地に近接した13枚の田をえらび、同一株調査を行つたところ、

6月26日と7月4日では7月4日の方がやや低密度であつた。このことは越冬地からの移動は同一ヶ所のみ行われるものではないらしいことを示すものと解されよう。また、1枚の田の棲息密度については虫数の最も多い田をえらび、10株ごとに1列をとり、縦横の1株:6株内の合計虫数によつて分布密度をしらべた。それによると、畦畔に接した株は虫数が多く、越冬地に平行した株の列は越冬地に近いほど多く、越冬地から離れるにしたがつて少なくなつてゐた。また、越冬地に直面した株の列に於ては畦畔に接している株以外の列には特に差がなかつた。さらに、大面積の水田に於ける棲息密度を知ろうとし、約60町歩908枚の田のうち170枚の田をえらび、越冬地に直角に4列、1列約900m 42枚の田の中央の1株を1直線に越冬地に向つて虫数調査を行つた結果、越冬地に近いところや900mはなれたところにも棲息密度の高い田の集りがあつた。これによると、イネクロカメムシの移動は、同一場所に飛び降りるものではなく、局部的に移動分散するらしいことが推察できる。